

ほうれん草とバツタ君

浅口市立金光小学校

三年生 西山心和

わたしは、十月になって野さい用プランターに、ほうれん草をはじめ植えました。そして、毎朝水やりをしました。十一月になり、

「もう、そろそろ食べられるんじゃない？」

と母が言いました。でも、わたしは、

「待つて。もうちょっと大きくなるから。」

と言って、食べるのを待つてもらいました。わたしは、ごまあえが大すきなので、さいしょにとったほうれん草は、ごまあえにしてみらうつもりでした。

ところが、次の日の朝、わたしはプランターの中に、ほうれん草と同じ色をした、ほうれん草のじくみみたいな形のバツタを

発見しました。わたしは、

「もう。何でいるの？どっか行ってよ。」

と言いながら、プランターをたたきました。バツタは動きません。それどころか、じっとしたまま、ほうれん草の葉をムシャムシャ食べているのです。わたしは、

「だめ。食べて。わたしのほうれん草よ。」

と言って、バツタをつかまえて、プランターの外に出しました。そして、これで安心と思つて学校に行きました。

それなのに、次の日の朝、何とまた、あのバツタがいたので。わたしは、イライラして、バツタをすぐにつかまえて、この日は草の中に動かさせて、

「もう、もどつて来んでよ。ぜったいに。」

と言いました。学校にいる間も、時々バツタに食べられたほうれん草のことが気になりました。だから、家に帰つてすぐにプランターの中を見ました。何とまたいたのです。わたしは、何で？、どうやって帰つて来たの？、と思ひました。しかも、バツタは少し太つて、少し大きくなつていふような気がしました。わたしは、家の中にいる母に大声で、

「またバツタがおるんじゃないけど、どうしよう。」

と言いました。母も外に出て来て、二人でプランターの中をじっと見ながら、どうすればいいか考えました。その時、母が、「こっちゃん、バツタって、ほうれん草の葉っぱをきれいに食べとるねえ。」

と言いました。わたしは、え？、お母さんは何を言っとるん？、と思いましたが、たしかに、バツタは一まいの葉をはしから丸く食べて、一まいの半分くらい食べていました。わたしは、ほかの葉も見てみましたが、ほとんど食べられていませんでした。だから、

「じゃあ、もう、このバツタの家にしてあげよっか。どうせ、またもどって来るし。」

と言って、バツタをプランターに住ませてあげることにしました。

そして、その日の夜、わたしもほうれん草を食べました。あまくて、やわらかくて、おいしいほうれん草でした。こんなにおいしいから、バツタが草よりほうれん草を食べたい気持ちも少しなっとくできました。

それから、バツタのことは気にならなくなりました。十二月になったころには、ほうれん草も少なくなりました。

十二月二十日に、家族で大そうじをしました。まどのそうじをするために、げんかんから外に出たら、ドアの右がわにバツタが一ぴきいました。そのバツタは、とても弱っているように見えました。体も、ほうれん草がかれたときのようになり、黄色っぽいうす茶色になっていました。わたしは、バツタのことがかわいそうになって、ほうれん草を一まいとって、バツタの口の近くにおいてあげました。でも、まどのそうじの後でバツタを見に行くと、ほうれん草は風にとばされて、またバツタだけがげんかんにのこっていました。兄は、

「バツタをほうれん草のプランターに入れてあげればいいが。」と言いましたが、わたしは弱ってしまったバツタをつかむのがこわくて、兄にたのみました。バツタは、もうほうれん草を食べてくれませんでした。そして、次の日の朝には、バツタはいなくなっていました。

わたしは、今もバツタのことが心配です。風にとばされてしまったのか。他の草むらに行ったのか。わたしは、バツタのことが知りたくなって、図書館の本で調べました。わたしは、バツタが冬をこせない短い命だと知り、とても悲しくなりました。だから、今、わたしはバツタにつたえたいことがあります。

バッタ君へ

バッタ君にはじめて会ったとき、「あっちに行つて」と言つてごめんね。この前、うちの前までおわかれに来てくれたんだよね。バッタ君に会つて、わたしは命のことを考えたよ。わたしに虫たちの命は短いことを教えてくれてありがとう。わたしは、来年もまたバッタ君の子どもたちに会いたいな。そのときは、ほうれん草をいっぱい食べさせてあげるね。そのために、わたしは来年もほうれん草をたくさん植えて待つているからね。これからは、全ての命のことを考えて大切にするよ。